

## 国際協力特別賞

「知らない」ことを「知った」今

学校法人 福岡雙葉学園 福岡雙葉高等学校 2年

内野 巴絵

ロヒンギャ難民少女の「睨みつけるようなすどい目つき」に絶句した。それは「凝視する・叫ぶ・慄く・泣く・黙す」、ありふれた請願者の眼差しではない。何かに「おびえ、怖れ、憤り」ながら、苦悩と悲しみからの開放を「わたしは生きていたい」と訴えている抗議のメッセージに他ならなかった。

毎日何十キロもの道のりを家族と一緒に歩き続ける、命がけの国境越えである。「飢え渴き」「着の身着のまま」で靴やサンダルもぼろぼろにほころび原型をとどめていない。世界から見捨てられた数千人、数万人が一縷の希望を求めての逃避行である。「この世のこととは思えない出来事」が現実起こっている。信じられない。そればかりか心底申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

この写真に出会ったのは、昨年八月のことだった。少女は、母が購読しているフォトジャーナル月刊誌『DAYS Japan』の表紙を飾っていた。びくびくしながら、そっとページをめくってみた。そこには目を背けたくなるような、むごたらしく残酷すぎる写真の数々が並んでいた。こんなことを報道すること自体赦されるのだろうか。あるいは報道しなければ人々に理解してもらえないからか。

イスラム国軍によって傷つけられ、血だらけの子どもたちがいる。南スーダンでは、蔓延する飢餓とコレラに苦しめられ、瀕死状態の人が転がっている。また棒のように痩せ細り、道路わきでうずくまるように横たわっている老人の写真にも啞然とする。足元には無眼の死が潜んでいる環境の下、子どもの将来の幸せを命がけで守ろうと祈る母親の姿には心を打たれた。命の無事を祈ってそっと手を合わせた。

知らなかった。陽の目を見ない発展途上の国々で、明らかに人間と自然の尊厳が危機にさらされていることを。地球のあちこちで、こんなにも多くの人々が生きる場所と時間を失っている。この問題にどうして無関心でいられるだろうか。

ところで私が所属しているカトリック教会では、ホームレスの方々への炊き出しや物品支援などを行っている。カレーを作る手伝いをし、ホームレスの方々に配ったり、言葉を交わして触れ合ったりすることで、「私は、ボランティアをしている！」という満足感に浸ることがよくあった。それはこうした世界の実情を知らなかったからだ。とんでもない自己満足だった。恥ずかしい。

今回、母の影響で手にした一冊の雑誌が心を揺さぶり、目を見開かせてくれた。「知らなかった」ことを「知ってしまった」今、これまでの漠然とした将来の夢や生き方、価値観が雪崩を打ったように崩れ落ちる感じがしている。「私には何ができるか。何をしなければならぬか」の目標がはっきりした。「医師になりたい」という夢が、「必ず医師になる」という、揺るぎない決意へとつながったのである。

「ロヒンギャの少女が待っている。榴散弾で顔面が血だらけになった少女が治療を待っている。」この地球上には様々な問題が山積している。戦争、紛争、飢餓、貧困、女性問題、子どもの労働、

環境問題など、命の尊厳が奪われている現場は、世界中にある。声にならない声、誰に届くことなく消えていく声が無数にある。これらはすべて「命のメッセージ」そのものだ。憔悴しきった人々の姿を「見て見ぬふり」はできない。空爆に遭い、亡くなった自分の子どもの遺体を抱える男性を囲む人々の眼差しは、悲しみと憤り、絶望感と怒りに満ちている。今は何もできないが、せめて傍にいてあげたい。

「待っていてください。必ず医師になって、戻って来ますから」

要項に「言葉にすれば世界を動かす力になる」とある。このエッセイは私にとって、「よりよい世界の未来を目指して」の新しい一步を踏み出す勇気ときっかけを与えてくれた。